

# SEMINAR

## 第136回 東南アジアの自然と農業研究会(G-COE との共催)

話題提供者: フォンリュブケ 留奈子 氏 (オーストラリア国立大学太平洋アジア研究科)

話 題: 「タイ北西部における山村農業の変遷—伝統的農耕に及ぼす市場志向要因の影響」

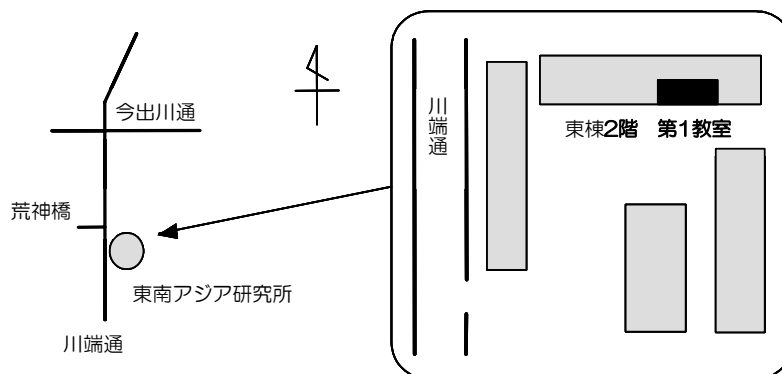
要 旨:

タイ国北西部山岳地域に散在する村落が、過去数十年に亘り辿った農業形態の変化過程は、背反的な次の二つの経済活動ベクターのせめぎ合いとして理解すると、同過程の特質と課題をよりの確に把握し得る。その一つは「自給自足的な陸稲及び水稲耕作の維持」であり、もうひとつは「換金性作物耕作及び非農家の家業の導入」である。換言すれば前者は伝統農耕型ベクター、後者は市場志向型ベクターであり、前記の農業変遷ダイナミズムは両ベクター間の「最適な兼ね合い(optimum trade-off point)」を模索する山地民の試行錯誤の表れといえる。

これまでカレン山村地域の開発問題は、焼畑循環農耕(タイ語で *rai mun wian*)の正当性を掲げた政治的活動を巡る「文化強調主義」と、それに付随する負の影響を指摘するアンチテーゼ(所謂“Karen Consensus”)の「経済強調主義」の二分対立で議論されてきた。しかし山地農業変遷の現状と課題を理解するためには、両議論を補完的に考慮する必要がある。この観点から本考察は、タイ国メーホンソン県内に立地するカレン居住山村五ヶ村(スゴー:3村、ポー:1村、カヤー:1村)を対象に、カレンの人々の主要四生業(①焼畑耕作による陸稲栽培、②水田耕作による水稲栽培、③換金性作物栽培、④賃金労働従事)に照準を当て、異なる環境における経済活動の諸相を示す。その上で、山地生業の実践と従来議論の捨象に鑑み、カレンの人々にとって実現可能かつ有益な方策を探る。

日時: 2008年6月27日(金) 16:00~18:00

会場: 京都大学東南アジア研究所 東棟2階 第1教室  
(京都市左京区吉田下阿達町46 川端通り荒神橋東詰め)



問い合わせ先:

佐々木綾子 京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科

Tel. 075-753-7163 mailto: sasaki22@asafas.kyoto-u.ac.jp

山本宗立 名古屋大学農学国際教育協力研究センター

Tel. 052-789-4223 mailto: sotayama@agr.nagoya-u.ac.jp

田中耕司 京都大学地域研究統合情報センター

Tel. 075-753-9600(センター長室)、9603(代表)、7307(研究室)

mailto: kjtanaka@cias.kyoto-u.ac.jp

ホームページ: <http://www.cseas.kyoto-u.ac.jp/seana/>